

平成30年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

16世紀前期の在俗宗教に関する基礎的研究

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	ヨシザワ ハジメ 芳澤 元
所属等	明星大学、人文学部、日本文化学科、助教
プロフィール	2005年龍谷大学文学部卒業、2013年大阪大学大学院文学研究科修了。日本中世史を専攻しています。とくに「室町文化」を考える上で中世の宗教に関心があり、歴史史料と禅宗文献を使いながら研究してきました。最近、室町時代に対する関心が一般的にも高まっていますが、「文化史」に対する研究は、必ずしも進展しているわけではありません。心構えとしては、歴史学だけでなく文学・美術・仏教学・言語などに関して、他分野の研究との連携を意識しています。

1. 研究の概要

本研究は、中世後期の社会と宗教の関係を解くカギとして、「在俗宗教」という新しい研究概念の有効性を検証するため、その実態的研究をめざした。「宗教の時代」と形容される中世の宗教史研究では、近現代に確立した宗派単位の枠組みを当てはめる考え方（宗派史観）は、その有効性如何がつねに議論されてきた。これに対して本研究は、こうした寺院社会側の秩序だけでなく、むしろ宗教に接する〈俗人側の視点〉から、当時の社会と宗教の関係を捉えなおす。具体的には、社会に広く存在した在俗信徒（居士）などヒトの問題、さらに彼らが体験した儀礼の問題、儀礼のなかで彼らがまとった装束など身体の問題などから、中世後期の在俗信徒のあり方を多角的に分析した。とくに16世紀日本の宗教といえば、一向一揆の活動や臨済宗勢力の地方展開というイメージが強いが、こうした宗教運動を最前線で担った在俗信徒に焦点を当てることで、その時代性の検証も試みるものである。

2. 研究の動機、目的

21世紀になり、M=ウェーバーの「世俗化」理論は、宗教社会学のなかでは抜本的に見直しが進められつつある。そのような現況に鑑みれば、日本史学界でも「世俗化」論という大味なグランド・セオリーから脱却する段階にきていると考える。世界のなかでも、独自の時代性・地域性をもつ日本史における宗教状況を解明するには、〈世俗社会と宗教の相互関係〉を議論の基軸に置いて、〈俗人の宗教的態度〉を示す歴史的徵証を継続的に分析するべきである。しかも、俗人の法体は、東アジア世界のなかでも日本特有の現象である。

そもそも、中国史研究では「居士仏教」と題した通史的研究が存在したが、日本史研究ではこうした研究はほとんどない。本研究では、「社会と宗教」を考えるひとつの指標を示していくことが問題意識の底流にある。

本研究は、「在俗宗教」という新しい研究概念を構築するべく、その歴史的実態を考察することを目指す。「在俗宗教」をキーワードとして、中世後期の社会と宗教の関係を、いわば〈俗人の視角〉から活写しようとするねらいがある。

3. 研究の結果

本研究期間中の1年で発表した主要な論文業績は以下のとおりである。

- ①芳澤元「足利將軍家の受衣儀礼と袈裟・掛絡」(前田雅之編『画期としての室町一政事・宗教・古典学』) 勉誠出版、2018年10月)。
- ②芳澤元「中世後期の社会と在俗宗教」(『歴史学研究』976号、2018年10月)。
- ③芳澤元「碧潭周皎の周辺と中世仏教—嵯峨・仁和寺・高山寺—」(早島大祐編『中近世武家菩提寺の研究』小さ子社、2019年5月)。
- ④芳澤元「書評・原田正俊編『宗教と儀礼の東アジア—交錯する儒教・仏教・道教—』」(『日本史研究』680号、2019年4月)。

なかでも②は、本研究の全体像を歴史的観点から包括的に論じた内容であり、歴史学研究会大会(日本中世史部会)2018年5月27日の大会報告を原稿化したものである。当日の質疑応答では、室町幕府史・戦国史研究者をはじめ、個別専門領域を超えた濃密かつ旺盛な議論を交わすことができ、歴史学の全国大会で発表する機会を得たことは大きい。対象時期としては鎌倉末期から近世初頭までを視野に入れている。第一に、在俗宗教の担い手として、(a)在俗出家者、(b)居士、(c)世間者の三種に大別した。とくに俗人のあり方に影響を与えた居士という形態は、鎌倉・南北朝期の日宋・日元交流のなかでもたらされた新しい生き方を示した。第二に、中世宗教が社会のなかで職業と仏道の一致を説いて在俗出家者や居士を取り込み、殺生の罪業と生業のあいだで悩む俗人側も仏教諸宗を複数選択し、自身の救済願望を満たそうとする過程を述べた。いわば仏教による職業振興は、在俗宗教を支える論理となった。第三に、職業仏道論の反動として、寺僧の還俗や破戒が問題視され、16世紀以降の大名権力がこれを停止するなか在俗出家者や世間者に打撃を与え、在俗宗教のかたちも変動したと論じた。

また①は、俗人が僧侶から衣鉢を授かり俗弟子となることを誓う受衣儀礼をとりあげた。足利將軍家が代々、夢窓疎石の門弟を戒師に指名し、將軍就任から十五歳までの間に受衣儀礼を済ませた実態を明らかにした。受衣儀礼では十重戒(菩薩戒)を授かるが、これは身体護持や、職位を得た国王百官が玉体安穏と天下泰平を祈る目的があった。なかでも、共同で受衣した後花園天皇と足利義政は、天皇家と將軍家の君臣関係を忠実に示した。足利將軍家にとって受衣儀礼は、夢窓疎石の俗弟子になると同時に、共同受衣の場合には、夢窓疎石の靈前で、国王(天皇)の玉体安穏を祈る百官の一員であることを誓う意味をもつと主張した。俗人の受衣儀礼は、在俗宗教のあり方を儀礼という観点から深めることができる。

4. これからの展望

本研究では、顕密仏教や新仏教を横断する存在として「在俗宗教」に検討を加えた。在俗宗教を担った人々は、それぞれ寺院社会と世俗社会の周縁部において、その境界を踏み越えて宗教に関わる活動をみせる存在だった。一般俗人が、自身の願望におうじて複数の仏教諸宗を選択するというあり方は、近世の寺檀制度とは位相を異にするが、最近の近世史研究では「複檀家」「半檀家」という概念も提案されている。その点からすれば、居士という形態は、檀家の多様性に収斂されつつ、位牌の戒名(居士号)などの形式で、近世以降もかたちを残すと考えられ、中世と近世の連続面・断絶面を考える際には見逃せない。

ただし、在俗宗教の宗教的・社会的意義やその矛盾が時代に与えた影響や、東アジア世界での位置づけについては、今後さらに精緻に顕彰していかなければならない(東アジアの問題については、上記の研究業績④のなかでも展望を示した)。

5. 社会に対するメッセージ

宗教の歴史は広範であり、英雄的・天才的な僧侶や有名な寺社だけに止まらない。我々のような〈俗人〉が抱えた問題にも思いをいたし、より等身大の視点から問題を究明することで、現代社会と宗教の問題、さらには前近代における廣義の〈文化史〉を、歴史的な文脈に沿って読みなおす機会にできるだろう。この十数年来、日本中世史研究では室町期研究が盛んだが、〈文化史〉・宗教史にとっても画期となる15-16世紀の研究は、現状ではけっして多いとはいえない。本研究で示した新視点も、ひきつづき学際的な観点からの検証が欠かせず、広く〈文化史〉研究への理解を呼びかけていきたい。